（別紙様式３）

令和３年３月２５日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　山梨県甲府市丸の内１－６－１
管理機関名　　山梨県教育委員会
代表者名　　教育長　斉木　邦彦

令和２年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
　令和２年５月２５日（契約日）～　令和３年３月３１日
２　指定校名・類型
　学校名　　山梨県立甲府第一高等学校
　学校長名　小林　俊一郎
　類型　　グローカル型
３　研究開発名　「やまなし創世」に資するグローカルリーダーの育成
　　DOOR－扉を開いて―
４　研究開発概要
　山梨県の様々な課題を SDGs と関連づけ，産学官連携のコンソーシアムを通じ多様な人達と協働的に研究して，それらの成果を県内外や国外に発信する。また，国際未来探究フォーラムの開催などにより国際的な対話力を養い，ローカルな視点とグローバルの視点をもった課題解決能力を有した人材を育成し，山梨県における学びのモデルを開発する。
５　学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無
・学校設定教科・科目　　開設している
・教育課程の特例の活用　　活用している
６　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
奥田　　徹	山梨大学生命環境学域長	学識経験者
八代　一浩	山梨県立大学国際政策学部長	学識経験者
廣瀬　浩次	山梨県総合教育センター所長	学校教育に専門的知識を有する者
斉藤　由美	山梨県知事政策局政策企画グループ参事	関係行政機関の職員
戸田　達昭	シナプテック株式会社代表取締役 CEO	カリキュラム開発等専門家

７　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
山梨県立甲府第一高等学校	校　　長　　小林俊一郎
山梨県立笛吹高等学校	校　　長　　井上　孝悦
山梨県立笛吹高等学校	企画研修主任　　古屋　寛往
山梨県教育庁高校教育課	主査・指導主事　大久保まさみ
山梨大学生命環境学部地域社会システム学科	教　　授　　渡邊　幹彦
山梨県立大学国際政策学部国際コミュニケーション学科	准 教 授　　吉田　　均
山梨学院大学国際リベラルアーツ学部	教　　授　　ウイリアム・リード
(株)少國民社	代表取締役社長　依田　訓彦
甲府ロータリークラブ	会　　長　　依田　訓彦
山梨県立甲府第一高等学校同窓会	事務局長　　金子　　寛

８　カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	戸田　達昭	シナプテック株式会社代表取締役 CEO	非常勤
海外交流アドバイザー	駒井マケイ	山梨県教育庁高校教育課 PA	非常勤
地域協働学習実施支援員	金子　　寛	甲府第一高等学校同窓会事務局長	非常勤

９　管理機関の取組・支援実績

（１）　実施日程

（２）

①　運営指導委員会

活動日程	活動内容
令和２年４月１日	運営指導委員会設置要綱を定め施行する。
令和２年７月７日	第１回運営指導委員会 ・本年度事業内容はじめ，評価や成果発表会の事柄についての協議 ・指導・支援体制についての確認 ・年度末の成果発表会終了後に，第２回運営指導委員会を設定

②　コンソーシアム推進協議会

実施日程	業務項目
令和２年４月	コンソーシアムを組織
令和２年７月上旬	笛吹高校訪問　コロナ禍で実施不可であった農業実習の代替事業「農業シンポジウム」を共同計画し，テーマ「農と命」，講師陣を暫定。８月１６日に実施
令和２年７月上旬	コンソーシアムである山梨大学教育学部附属中学校訪問。生徒のプレゼン交流を計画。９月に本校開催の国際未来探究フォーラムへの中学生の発表，本校生徒が出向く形での発表会，年度末の本校生徒発表会への中学生のプレゼン参加等について決定
令和２年７月２２日	第１回コンソーシアム推進協議会 ・令和２年度事業における活動計画について協議

	・支援体制についての確認 　相互にお互いの必要とする情報等を補完し，課題解決に向けた取り組みをしていくことを確認 ・年度末の成果発表会終了後に，第２回協議会を設定
令和２年７月２２日	県農政部と打ち合わせ。「農業シンポジウム」を連携して実施していく方向を確認
令和２年９月	県農政部を訪問，県産品販売戦略について本校生徒との共同開発を計画。また，県が抱える農業課題を本校生徒と共有し，協働的に取り組んでいく方向を確認

（２）実績の説明

①管理機関による事業の管理方法や地域において構成するコンソーシアムの構成

〈コンソーシアムの構成団体／学・官・産・民で構成〉

・山梨県教育委員会高校教育課，義務教育課　・山梨県知事政策局政策企画グループ
・山梨県観光文化部　・山梨県農政部　・山梨県産業労働部　・甲府市教育委員会
・笛吹市教育委員会　・甲府第一高等学校（＊）　・笛吹高等学校（＊）
・山梨大学生命環境学部地域社会システム学科（＊）
・山梨学院大学国際リベラルアーツ学部（＊）
・山梨県立大学国際政策学部国際コミュニケーション学科（＊）
・山梨大学教育学部附属小中学校　・株式会社少國民社，甲府ロータリークラブ（＊）
・甲府第一高等学校同窓会（＊），保護者会
・シナプテック株式会社，Mt.Fuji イノベーションエンジン
（＊）はコンソーシアム推進協議会の委員を兼ねる

②カリキュラム開発等専門家の配置と業務

〈カリキュラム開発等専門家〉シナプテック株式会社代表取締役 CEO　戸田達昭氏

地域や学校のニーズや現状・課題の分析を通じたカリキュラム開発及び人材の発掘・教育資源の収集・整理等のプロジェクトマネジメントに係る業務を担う。

活動日程	活動内容
令和２年７月７日	運営指導委員会会議後に，本校のカリキュラムの開発，活動計画について協議
令和２年７月１０日	コロナ禍で休止状態であったカリキュラムが再開し，「グローバルリーダー育成セミナー」を開講
令和２年１０月上旬	コンソーシアムでもある Mt.Fuji イノベーションエンジンを母体とする Y-NEXT（高校生向け起業チャレンジ事業）を本校と連携して推進していく方針を決定
令和２年１２月２５日	コロナ禍での学習停滞を受け，探究活動内容のブラッシュアップの方策についての協議。発表会時の外部講師の充足並びに以降のメンター派遣の方針を決定

③海外交流アドバイザーの配置と業務

〈海外交流アドバイザー〉山梨県教育庁高校教育課 PA　駒井マケイ氏

外国人との深いつながりを通じて，国際競争力スキルアップ講座，国際未来探究フォーラム，海外研修旅行において，グローバルな視点で計画段階からのアドバイザーとしての役割や，本事業について外国人に広く活動を広めてもらう広報の役割を担う。

活動日程	活動内容
令和２年７月９日	「イングリッシュプレゼンテーションセミナー」を「イングリッシュキャン

	プ」の代替事業として実施
令和２年９月２６日	実践編では２年探究班計１５班に対し県内 ALT を８名動員。充実した指導をいただく

④地域協働学習実施支援員の配置と業務

〈地域協働学習実施支援員〉金子寛氏（甲府第一高校同窓会事務局長）

各教科や科目・総合的な探究の時間等の実施時における外部機関（OB や行政，産業界など）と学校と生徒をつなぐ業務を担う。

日程	内容
令和２年７月２２日	年度計画にある国際未来探究フォーラム（本校通称：一探未来フォーラム）の在り方についての協議，及びパネリスト陣を紹介いただく

⑤管理機関（コンソーシアム含む）による主体的な取組

・運営指導委員会，コンソーシアム推進協議会の運営・連絡調整

・行政との連携に関わる連絡・調整

・コロナ禍における事業変更等における指導・助言

・予算執行に関わる指導・助言

＊コンソーシアムによる取り組みについては９（１）参照

⑥国費に上乗せした独自の支援や取り組みの実施

特記事項なし

⑦継続的な取組を行うための教員の人事面における配慮

特記事項なし

⑧高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

令和２年３月２４日，本校は，山梨大学生命環境学部と「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の実施に際し，高校教育と大学教育の連携を促進，多様化する高校と大学の教育を円滑に接続することにより，高校の教育の改善充実を図ること及び生徒の将来の進路選択に資するために覚書を交わす。（有効期限は令和４年３月３１日）なお，内容は以下のとおりである。

１　カリキュラム開発への協力　　２　学習支援　　３　運営指導

４　カリキュラムの評価　　５　その他　本事業推進に関する事項

⑨事業終了後の自走を見据えた取組について

・本校では特に１年次の段階での探究の基礎基本の習得を目指してワークシートの開発に力を入れている（成果報告書に記載予定）。

・コンソーシアムを構築し，行政（県農政部や知事政策局等）との関わりを持つ中で，社会課題を共有し，双方向のメリットを模索しながら友好的な関係性が保たれている。また，地域活性化や国際社会の様々な課題（SDGs）を見据え，協働して取り組むことが可能である。

・地域協働学習支援員の役割は，事業終了後も地域との協働学習の窓口として期待できるため，本校同窓会事務局長の役職にあたる方にお願いしたい。

・同じく，保護者会（PTA）から講師をお願いする機会も多く，教育活動の資源として双方向にメリットを求め関係性の構築に努めている。

・様々な教育助成事業があり，不安定な社会構造を見据える教育界のニーズに照らし合わせて助成を得ることも可能と考える。

１０　研究開発の実績

（１）　実施日程　＊主だった実績のみ記載。なお，コロナ禍で５月下旬まで一斉休校

実施項目	実施日程											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
運営指導委員会				○								○
コンソーシアム推進協議会				○								○
連携大学講座					１回	１回	１回	１回				
行政との連携講座					１回	１回						
イングリッシュプレゼンテーションセミナ―の実施						２回						
国際競争力スキルアップ講座							１回	２回	３回	２回	２回	
その他の講座、セミナー等開催			１回	１回			２回			１回	４回	
国際未来探究フォーラムの開催						２回						
その他フォーラムの実施					１回							
実地調査探究活動			コロナ禍において県外は実現せず。県内では時期やエリアを選択しながら通年実施									
発表会の実施			２回			１回				２回		１回
研修旅行									○			
企業訪問の実施			コロナ禍において再三延期を試みるも実現せず							１回		
Y-NEXT プログラム							２回				１回	１回

（２）実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

各班の取り組み一覧（①は１班を示す）

□1 年

①英語苦手意識の払拭　②コロナ禍による生活習慣の変化で低下した睡眠の質改善　③生産量に比して少ない桃消費の改善　④小水力発電も農業も人手不足なことの改善　⑤LGBTQ を受け入れてもらうには　⑥昇仙峡地域～金峰山へ通じる古道の保全と再興　⑦子どもの気の休まる環境が少ない　⑧お昼寝による午後の集中力向上　⑨甲府の魅力を再発見～誰からも愛される街を目指して～　⑩遠隔医療は有効かつ可能な医療行為なのか？　⑪ストレス改善　⑫プラガール

□２年

①Spreading "Online Classes"　②Beat COVID-19　③Gathering People　④Disaster Prevention, of the Inexperienced, By the Inexperienced, for all the people　⑤Kindness For LGBT　⑥Children ×Elderly×Vacant house　⑦Why does plastic waste increase?　⑧Possibility of power saving　⑨Digital Detox in Yamanashi　⑩Can You SPEAK English？　⑪Small hydro power generation　⑫TANADA！　⑬Know Visit Pass Shosenkyo　⑭Interest of Nature　⑮To improve Takeshima island problem

□３年

①災害による PTSD とアートセラピーの探究　②山梨県の雇用問題について　③紙資源の問

題について　④振動は発電の時代へ　⑤昼寝でお目目ぱっちり生活　⑥小水力発電の普及×エネルギー問題　⑦竹の利用～南部町における竹問題の解決～　⑧効果的な広告　⑨脱！“コミュ障”～よいコミュニケーションがよい仕事をつくる～　⑩コイ×コメ　⑪ポリフェノールの可能性　⑫海なし県に海をつくろう！プロジェクト　⑬甲府市フォトロゲイニング　⑭子どもの貧困とコミュニケーション能力　⑮海の豊かさを守ろう～山梨県×海洋汚染～　⑯若者の主体性を育む地域社会　⑰はねだし桃を活用した新しい商品の開発

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間，学校設定教科・科目等）

１）「総合的な学習の時間」を「グローバル探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」に代替（１・２・３年次）

２）「社会と情報」（２単位）のうち１単位を「グローバル探究Ⅰ」に代替（１年次）

３）学校設定科目として「Advanced Practical English」（４単位）（２年次）

４）学校設定科目として「グローバル公共」（１単位）（２年次）

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について

・教科英語の実践とし，身近な社会問題をトピックに上げた教材を作成し，ALT と協働しながらの英語でのポスター作成を取り入れ，そのソフト（パブリッシャー）が探究ポスター作成のベースとなっている。

・教科国語の実践とし，プレゼンの仕方，効果的な聞き方，構成を意識して書く，といった力の育成に努める。また，英語科 ALT とも共同しながら推進した。

・教科理科（科学と人間生活）において，実験，実習を通じてデータの作成，プレゼンの方法等の育成に努めた。

・教科芸術（美術）とし，視覚伝達デザインの授業においてポスターを作成。その原理や効果的な表現技術を習得させた。

・その他，すべての教科において横断的思考が働くと考えられる。逆に，探究活動が教科学習にも横断的に反映することが認められる。

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

・運営指導委員会及びコンソーシアム協議会における検証，評価活動

・カリキュラム開発等専門家・戸田達昭氏による専門的なアドバイス

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割，それを支援する体制について）

・１～３年の全４４班に対し探究顧問を配置。教科の特性を生かした専門的なアドバイス及び渉外業務を担当する。また，２年生１５班に対し英語顧問を配置。英語プレゼンテーションの指導を担当する。

・校内探究科運営指導委員会を設置し定期的に開催。校内探究科で取り組む指定事業を多面的に検証し，有意義かつ効率的な運営を目指す。

⑥カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザーおよび地域協働学習実施支援員の学校内に置ける位置づけについて

９（２）実績の説明参照

⑦学校長の下で，研究開発の進捗管理を行い，定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ，計画・方法を改善していく仕組みについて

・指定事業担当教頭を配置する。また，統括主任として探究科主任を配属し，探究推進主任をリーダーに，７名のスタッフ教員で実際の校内運営を行っている。なお，毎週の定期的な打ち合わせと管理職はじめ関係部署（コンソーシアム含む）への報告，連絡，相談体制を整えている。
・学校評価委員会による探究活動の評価，改善の試み

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について
・中学校との交流プレゼン並びに小中学校への出前授業の実践（双方向学習に向けた良好な関係性の構築）
・県農政部との県産品の販売に関する本校生徒との協働的な情報発信の実践及び連携開発の取り組み

⑨運営指導委員会等，取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について
・９（１）参照

⑩類型毎の趣旨に応じた取組について　【グローカル型】
・計画段階ではイングリッシュキャンプを計画していたが，コロナ禍で泊を伴わない「イングリッシュプレゼンテーションセミナー（理論／実践）」に代替した。「理論編」では大学教授にプレゼンテーションの在り方を細部に渡ってレクチャーいただき，それを受けた「実践編」では，海外交流アドバイザーにより県内高校 ALT８名を派遣していただき，２年生各１５班に対し，細かな指導を行った。
・従来であれば本校研修旅行（フィリピン・セブ島）にて学校や日系企業に赴き，探究成果を現地で発表し，ディスカッションを通じて実践的なコミュニケーション能力を育むのであるが，本年度はコロナ禍で代替事業「Door Glocal Program ―探究科イングリッシュプレゼンテーション＆海外講師と語る SDGｓ」を実施。SDGｓに特化された海外講師１１名を招聘し，同じく２年生各１５班はブースに分かれ，成果発表並びに SDGｓをテーマにしたディスカッションで同等の力を養うことができた。
・国際コンテストや他各種コンクールへの応募は２年次の必須項目である。ほとんどのコンクールがオンライン化されたが，積極的に応募を試みた。（成果は下記参照）
・本校は，「本当の情報は現場の空気の中に漂っている」をキャッチコピーに１年次より実地調査を必修化している。コロナの影響で滞った時期が長かったが，県内を中心にグローカルな現場の生の情報に触れ，探究を深めた。
・コンソーシアムとして連携している県立笛吹高校では県産シャインマスカット（葡萄の品種）の台湾への輸出演習に取り組んでいる。昨年度は本校生徒代表が基礎中国語を習得したうえ同行し，成果を共有した経緯を持つ。本年度は実施できなかったので，来年度に期待している。そこで「国際競争力スキルアップ講座」として，１年生希望者１７名に対し，中国語特別講座を開講した。台湾研修を視野に入れつつ，国際社会の中で中国語に親しむ意義は大きいと考える。

⑪成果の普及方法・実績について
・出前授業とし，コンソーシアムをはじめとする小中学校へ出向くことを計画
・コンクールへの参加（論文含む）を促し情報と探究成果を発信する
・３年次実施の「ファイナルプロポーザル（提案活動）」において探究成果を地域へ還元
・主体的校内組織「とびらプロジェクト本部」による国際探究未来フォーラムの実践，及び「情報戦略班」による Youtube による情報発信，Social media 班による SNS を媒体とし

た情報発信を本年度新規に立ち上げる。

〈本年度実績〉

・学教育振興財団助成 中谷医工計測技術振興財団″成果発表会（東日本大会／仙台）小水力発電×エネルギー問題」１２月２７日（日）″zoom にて実施

・短期留学　トビタテ留学 JAPAN　前年度１年５名が申請するもコロナの関係で中止

・助成事業　本田トモダチプロジェクト前年度生徒２名が申請するもコロナの関係で中止

・Y-NEXT イノベーションコンテスト（本選）７月１９日（日）山日 YBS ホール　「お昼寝普及委員会」最優秀賞，「本栖湖に海をつくろう」優秀賞，「関係性の貧困」はくばく賞

・第２０回高校生地球環境論文賞（中央大学主催）　５名が入選

・第１５回龍谷大学高校生ビジネスアイディアコンテスト（本選）（龍谷大学主催）「空き家から始まる新たなコミュニティー」プレゼンテーション一般高校生の部優秀賞

・２０２０地域活性化コンテスト「田舎力甲子園」（福知山公立大学主催）「TANADA! Restoration of ″YUI community″」奨励賞を受賞

・WWL・SGH×探究甲子園２０２１（予選）（関西学院大学・大阪大学・大阪教育大学主催）「Can you SPEAK English?」書類選考通過、本選出場（２０２１年３月２１日予定）

・Mt Fuji イノベーションキャンプ２０２０　スタート部門「シエスタ プロジェクト」第３位入賞

１１　目標の進捗状況，成果，評価

（１）目標設定シートの考察　〈添付資料〉目標設定シート（実績値記入版）参照

１．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

a 英検２級または CEFR の B１以上の生徒数

１年から３年までの平均値を算出したが，年次が増すにつれ資格取得に向けた取組が顕著である。特に探究科３年生の英検２級取得率は過半数となっている。

b 将来山梨で働きたいと考える生徒の割合

探究科，普通科問わず３分の１の生徒が地元就職志向を示している。

c トビタテ留学 JAPAN，YFU，ロータリー等，留学する生徒や受け入れる生徒の合計人数

本来であれば２，３年生がトビタテ！留学 JAPAN にて６名が選考されていたが，コロナ禍で中止となった。来年度は２名が採択されている。しかし国際交流系の事業はしばらく困難であると予想される。

２．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

a 研究・課題発表大会等での上位入賞者数

本校では，特に２年生においてコンテスト等への応募を必修にしており，目標設定値を上回る成果が得られた。来年度以降もコンテストを活用し探究活動の深化に努めたい。

b 推進校主催の発表会等の外部参加者数

国際探究フォーラム（本校呼称;一探未来フォーラム）においてコンソーシアムから中学生チームを招待し有意義なプレゼン交流を図った。また，年度末の成果発表会「山梨ブランドサミット」では，英語講師８名，来賓３１名（YouTube 視聴交流含む），中学生３２名が参加し開催された。例年であればさらに多方面に働きかけるのであるが，密の回避も鑑み最大限の工夫を試みた。

３．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

a 学校設定科目（グローバル探究）で外部人材が参画した延べ人数

大学講座や行政によるセミナーをはじめ，コンソーシアムの協力を得ながら多くの外部講師の指導をいただくことができた。各回でディスカッションを充実させ，目標とする力の育成を図った。

（２）本校独自のアンケートについて

年度のはじめと終わりに同様の質問（２５問）について１年から３年までの探究科の生徒にアンケートを実施した。今年度は、新型コロナウイルスの影響で探究科の活動は夏休み以降に始まり，活動に対して不安を抱えたまま入学した１年生に対して，３年生リーダーが Google class room の YouTube ビデオから探究活動について３年生自身の３年間の探究活動の内容・活動等について説明をし，１年生の不安を少しでも和らげる工夫などを行った。

なお，アンケート結果，考察等については成果報告書の中で報告させていただく。

１２　次年度以降の課題及び改善点

本年度最大の障壁になったコロナショックであるが，そこから得たものも多い。オンラインの是非はあるにせよ，新しい交流様式として積極的に活用していくべきである。海外との交流も身近になると期待している。本校においては進度の遅れが著しかった１年生に対して，コンソーシアムを中心とする身近な企業の方々に温かい支援をいただいた。メンターとして毎週のように支援ブースを開設し，年明け以降理想的な探究のブラッシュアップができた。また，コンソーシアム内では双方の“winwin”の関係を模索していく中，新しい連携や活路が発見できた年度でもあった。一例を挙げれば，生徒が SDGs を掲げた探究ポスターを地域の図書館に展示した際，ある企業の目に留まり，以後「八ヶ岳 SDGs コミュニティ」と題し，大人と子供で SDG s をテーマに共創的な対話空間を創出できることとなった。メンター制度を含め，今後事業終了年度までの大きな柱としていきたい。

また，コンソーシアムや地域との協働的な取り組みの中では，大人の力も借りながら課題解決のためのプランニングが“形”になったり，それを受け継ぐ後輩との協働探究に広がりを見せたりするなどしている。このように，地域社会の一員としての自尊の念のもとで探究に邁進できることは理想形である。また，そのような事例も増えつつある現在，探究成果のデータベース化も急務となる。一方で、校内の共通理解の促進や教員間の意識改革も大切であり、今後の課題でもある。

しかし，一番大切なことは，生徒に探究活動の意義を長期ビジョンでイメージさせることであり，モチベーションの強化に向け生徒とともに教員も探究心を掲げなければならないと考える。

【担当者】

担当課	高校教育課	ＴＥＬ	055-223-1763
氏　名	大久保まさみ	ＦＡＸ	055-223-1768
職　名	主査・指導主事	e-mail	ookubo-hcjj@pref.yamanashi.lg.jp